2025年度 共立女子大学・短期大学「地域連携プロジェクト」

共立女子大学のプレールーム利用による地域の保育施設との連携

代表教員：家政学部 児童学科　小原敏郎

プロジェクト構成員：末廣杏里、児童学科 小原ゼミ4年生

プロジェクトの背景と目的

背景：都市型保育の課題

千代田区内の保育施設には、敷地が狭く園庭を持たないという特有の課題がある。子どもたちがのびのびと遊ぶ空間の確保が急務となっている。

目的：資源の開放と実践的学び

本学が有する「物的・空間的環境（プレールーム）」と「人的資源（教員・学生等）」を開放する。地域の子どもたちへ充実した遊びの環境を提供するとともに、学生の実践的な学びを深めることを目的とする。

実施概要と活動環境

活動実績と参加者

実施回数：年間7回実施（前期3回：6月～7月、後期4回：10月～1月）

参加者数：延べ140名の子どもと57名の保育者が参加

学生参加：小原ゼミの4年生11名が参加

参加園と環境

参加保育施設：小学館アカデミー神保町保育園、まなびの森保育園神保町、千代田区立西神田保育園

環境構成：普段から0～2歳児が多く利用する子育て広場「はるにれ」の環境を利用し、子どもたちが安心できる空間を提供した

子どもの発達の学び

0・1歳児の姿

感覚的な遊びへの没頭

音の鳴るおもちゃやクーゲルバーンなど、感覚を刺激する遊びに長く集中する姿が観察された。

2歳児の姿

認知機能の実践的確認

おもちゃに対する独占欲（自己中心性）や、視覚以外の音を手がかりにした空間認識の発達段階を実践的に確認できた。

保育者の姿からの学び（連携）

自然なサポート連携

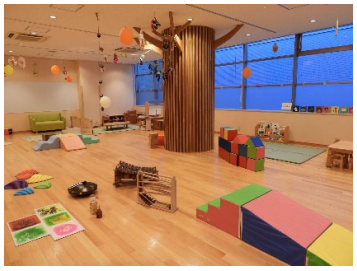
帰りたくない子への対応や、靴を履かせる場面などにおいて、複数の保育者同士が言葉を交わさずとも自然に連携して対応している場面があった。

情報共有による促し

「こういうおもちゃが好きなんだね」と保育者間で意図的にコミュニケーション（情報共有）を取りながら、子どもの興味を引き出し成長を促す関わりを実践していた。

空間全体のバランス

各コーナーに大人が適切に配置されるよう連携を図り、空間全体のバランスを取ることで、子ども同士のトラブルが少なく落ち着いた環境を作れることに気づいた。



まとめ　地域貢献としての成果と学生の学び

地域貢献としての成果

園の事後アンケートでは、高い評価を得ることができた。

子どもたちが「『きょうりつにいく』と楽しみにしている」といった嬉しい声が多くあった。

「地域と繋がっていることが保護者にも好評」であり、都市型保育の課題解決の一助となっていることが確認された。

学生の実践的な学び

普段の実習では関わりの少ない0～2歳児との実践的な関わり方を学ぶ貴重な機会となった。

学生が主体的に子どもの情報を把握するため名札を付けたり、特定の場所に固まらず各コーナーに分かれる配慮を行えた。

遊びを提案して広げる一方で、「一人遊びに没頭している子への関わり方」など、介入タイミングの難しさも実践的な課題として経験した。

今後の課題と次年度への展望

今後の課題

園が考える「学生への期待」をより明らかにする必要があると考えられる。

これにより、学生が迷いなくより主体的にプロジェクトへ参加できる仕組みを構築していきたい。

次年度への展望

園の先生方からも高い評価と感謝の言葉をいただいており、双方にとって有意義な取り組みとなっている。

来年度もゼミ生の実践的な活動の場として、この取り組みを継続・発展させ、地域に根ざした貢献を続けていきたい。